



第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

佐々木, 和子

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 10(平成23年度事業報告書):39-39

(Issue Date)

2012-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003861>



である（坂江渉「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」『第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集 震災から15年—地域歴史資料の現在—』、2010年）。

1997年から、日本史教室の古文書合宿、さらには史料ネットが市民とともに行った「被災史料整理」で目録カードを作成した。それでも半分以上が未整理の状態だった。その後、2006年度から文学部海港都市研究センターが行った神戸・兵庫港関係史料調査で全点の目録が完成、2009年度には同地域連携センターが画像データを作って整理を完了、2010年5月10日に所蔵者へ返却した。

実は、長濱家文書は多くの災害をくぐり抜けてきた。阪神・淡路大震災は勿論のこと、1945年の神戸大空襲も奇跡的に回避していた。長濱家はもともと神戸市葺合区（現、神戸市中央区）にあったが、1940年に軍需工場の用地として接収されてしまい、現在の場所に引っ越してきた。直後の1945年3月の空襲により、葺合区を含む神戸市東部の海岸部は壊滅的な状態となったという。

このような特異な経歴を有する長濱家文書について、3月22日-23日、「神戸葺合の歴史と長濱家（仮）」と題して学内（文学部小ホール）での簡易展示を行った。「山の利用をめぐる」「葺合区のなかの脇浜村」「魚市場の面影」「災害と長濱家」といったトピックごとに、大学院生・学部生が協力してコンテンツをまとめ、パネルを作成して、現物とあわせて展示した。なお、5月には、神戸生涯学習センター・コムスタこうべにおいて、あらためて展示を行う予定である。

（文責・添田仁）

第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

本年度はいくつの団体に協力して、次のような震災資料に関する報告や意見交換会などを催した。

① 2011年10月20日

S 科研グループの第11回地域歴史資料学研究会において（人文学研究科）、佐々木和子が「阪神淡路大震災における震災資料」と題する報告をおこなった（地域連携センターと、阪神・淡路大

震災資料の保存・活用に関する研究会が協力団体として参加した）。

② 2011年11月18日

国際資料研究所主催の「DJI セミナー」が松本大学にて開かれ、佐々木和子が、「記録を作り、記録を残す—次代へ伝える経験—」と題する報告をおこなった。

③ 2012年2月21日

東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館、東北大学附属図書館、岩手県立図書館、宮城県立図書館の職員の方々と、「被災地図書館との震災資料収集・公開に係る意見交換会」を開き意見交換をおこなった（神戸大学附属図書館にて）。

（文責・佐々木和子）

第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成（学生・大学院生教育）

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年（2004）度から平成18年（2006）度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた（文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム）。このような事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）と「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。

地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3つの科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。

また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解説・展示活用などの実践的方